

日本最後の空襲

福岡市博多区 石黒 実

『花もつぼみの若桜……』の「学徒動員の歌」を合唱しながら、国の大事に殉ぜんと、山口県は光市「光海軍工廠」へ向かって学び舎を発ったのは、中学3年の1学期が終って間もない昭和19年7月26日、真夏の暑い日であった。

そしてその1年余り後に、しかも20年8月14日、太平洋戦争終結の1日前に、米国B29の大空襲で、学友15名を一瞬にして失う羽目になることなど、当時誰が予想したであろうか。

近くの徳山や下松は、連夜の如く空襲に脅かされていたのに、光海軍工廠への空爆はこの時が初めてで、しかも日本本土では最後のものとなった。

たった1日の差で、15名の学友の命が奪われたあの日の悔しさ、悲しさは、我々生き残った同級生の心の中に深く焼き付いて、今でも忘れることはできない。

動員学徒として、工場勤務をしたのは約1年と少々であったが、一日二交替の慣れない仕事は14歳、15歳の我々にはかなりきついものであった。

工場から寄宿舎までは歩いて40分位だったと思うが、夜遅く帰って来て疲れた体を横にしたと思ったら、もう「起床5分前……」のスピーカーからの低い声。午前4時55分である。

午前5時には上半身裸で、寄宿舎の中庭に集合し、乾布まさつが始まる。真冬の粉雪が舞う朝なんか特に辛かった。

大豆カスといっしょに炊かれたわずかなご飯と、一杯のお湯みたいな吸い物だけの食生活でよくもあんな長時間勤務と睡眠不足に耐えられたものである。

とにかく、いつもひもじい思いをしていたことは今でも忘れられない。

戦後、さまざまな形でとり上げられた戦争被災体験談。とりわけ若くして散っていった特攻隊員や動員学徒の実態が、映画や本等で世に明らかにされ、中でも「ひめゆりの塔」や「きけわだつみの声」等は、観る者の心にいろいろな感動を与えている。

私たちの学友15名が、ひもじいまま、翌日の終戦も知らず、家族の誰にもまみえることなくさびしく死んでいったことなどは、ご遺族の方と我々学友だけしか知らないことではあるが、その当時日本のあちこちで、同じような悲惨なことが起こっていたということは想像に難くない。

光海軍工廠の空襲で悲しくも散っていった若い学徒たちのことは、広く報じられていないので、あまり知られてはいないけど、私たちの脳裏からは決して消えることはない。

今でも毎年8月14日には、郷里山口で慰霊碑の前に集い、亡き学友の冥福を祈っている。

恩師の中には既に他界された方もおられるが、慰霊祭には必ずご出席される先生方もいらっしやる。

年齢60を過ぎた者の集う同窓会では、それぞれの人生を歩いてきた多種多様な話題で賑わうものなのでしょうが、私たちの場合、申し合わせたように、あの動員中の苦しかった、辛かった、ひもじかった、そして学友を失って悲しかった思い出話が話題の主流になっている。たった1年有余の動員期間の方が、その何十倍もの人生遍歴よりも強烈に心に焼き付いている証でもある。

右手を爆風でちぎられ、傷口をただガーゼと包帯でしばっただけで、収容所の床に転がっていた学友の最後のつぶやきが今でも耳に残っている。

「帰ったら前の川に釣りに行こう。あそこはよく釣れるいね」

おそらく彼は、うすれゆく意識の中で、家の近くの川で釣りをしたことを思い出したのだろう。私は彼の耳もとで、「早くよくなっていっしょに川に行こうえ」と涙ながらに言ったけど、多分もう彼には聞こえなかったと思う。急きよ郷里の山口から一日がかりで駆けつけた彼のお姉さんが、彼の残された左手をしっかりと握ってハラハラと涙をこぼしながら、弟の名を呼び続けていた姿も忘れることができない。

私が戦争が終わったことを知ったのは、10日位経ってからと思う。負傷者に付き添って収容された場所が、かなりの辺地だったせいもあって、私が最後まで付き添った前述の学友もしばらくは行方不明になっていたことは、かなり後で知った。

一度は訪ねてみたいと思いながら、いまだにその機会を得ないままにいるけど、爆弾と焼夷弾で、松林が消滅するほどめっちゃめっちゃになっていた光の海岸も、今では何事もなかったかのように、あの美しい白砂青松をよみがえらせていることであろう。

白雲は悲しからずや大空を
ただ一人して流れゆくかも

国語の石川先生 詠

岩まくらかたくもあらん安らかに
眠れとぞ祈る学びの友ら

詠不詳

秋の夜の母が手向けの子守唄
安けく眠れ母の逝くまで

学友田代君のご母堂 詠

少年のこえ母の日をゆすぶりて
よみがへり来る修羅のまぼろし

前述の私が最後を看とった
学友芳西君のご母堂 詠